

ヴァイスマンと獲得形質の遺伝

鈴木 大地

筑波大学大学院 生命環境科学研究科

獲得形質の遺伝は一般に、進化の総合説では否定されている。それは「体細胞で新しい形質が獲得されても、その遺伝情報が次世代に伝達されないため」と説明される。この説明には、①；生殖系列と体細胞系列の区別、②；遺伝子型から表現型への一方向性、さらに③；①と②を並置すること、が前提とされている。これらのテーゼは現代においても総合説の中核を担っており、特に遺伝子中心主義的な文脈でその重要性は更に高まる。また総合説の中心的基盤は、ダーウィン主義・ヴァイスマン主義・メンデル主義という3つの側面に分析することができるが、獲得形質の遺伝の否定に関するこれらのテーゼはヴァイスマン主義とメンデル主義的な側面が強い。生物学史上においても、獲得形質の遺伝の否定はヴァイスマンが主導的に行ったものとされており、この議論におけるヴァイスマン主義の重要性は高い。それではこれらのテーゼは進化一般を論じるにあたって妥当と言えるのだろうか。ヴァイスマンはすべての獲得形質の遺伝を否定したのだろうか。本発表では、近年の研究を踏まえつつ、獲得形質の遺伝について生物学的・哲学的・科学史的に精査する。